

「『この』『その』の記述的翻訳研究」からの提言

英日翻訳テキストのコ系・ソ系指示詞はどんな場合に、どの程度減らせるか

香取 芳和

(フリーランス翻訳者・講師)

Abstract

Japanese texts translated from English tend to contain more *ko*-type demonstratives (roughly equivalent to English “this”) and *so*-type demonstratives (roughly, “that,” “the,” or “it”) than is typical for texts of similar nature originally written in Japanese. This is often true of professionally translated, apparently redundancy-free texts, as well as those produced by inexperienced translators. “A Descriptive Study of Japanese Demonstratives in Texts Translated from English” (Katori 2016) confirmed this tendency and sought to identify some of the reasons for the increased use of demonstratives. This paper attempts to examine whether the use of *ko*-type and *so*-type demonstratives in translated texts can be reduced, suggests a few of their uses for possible omission and discusses the effects such omission might have on the impression of the text.

1. はじめに

実践報告「『この』『その』の記述的翻訳研究」(日本通訳翻訳学会・翻訳研究育成プロジェクト編『翻訳研究への招待』第15号掲載、以下「実践報告」)では、英語から翻訳された日本語テキストでは、もともと日本語で書かれた同種のテキストと比べて、コ系・ソ系指示詞が多く使われる傾向があることを確認した。コ系・ソ系指示詞が増える原因の一部は、訳者の習熟度によって異なる。1) 経験の少ない翻訳者や翻訳学習者の場合には、英語テキストの結束装置(とくに Halliday & Hasan 1976 が *reference* として分類している結束装置)の不必要な訳出や不用意な定訳使用がコ系・ソ系指示詞の主要発生源となっている(添付資料 1)。2) 翻訳者の技能が上がるにつれて、英語の結束装置である *reference* にコ系・ソ系指示詞を当てる例は減る。しかし同時に、英語テキストのひとつのセンテンスや節や句を、複数の文や節に小分けして訳し、得られた節と節をつなぐために使用するコ系・ソ系指示詞は増える。統

KATORI Yoshikazu, “A Suggestion Based on “A Descriptive Study of Japanese Demonstratives in Texts Translated from English: Where, and to what extent, can the use of demonstratives in translated texts be reduced, if at all?” *Invitation to Interpreting and Translation Studies*, No.16, 2016. pages 27-46. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

制力の強い英語連辞軸に節や句の形でつながれたあるいは埋め込まれた情報を、連辞構造の弱い日本語に移しかえるときに、また指標性の強い表現を好む日本語に移しかえるときに、小分けして発話の場を指標しながら提示する必要が生じるためだと考えられる。3) 英日翻訳でコ系・ソ系指示詞が多い 3 つ目の理由は、訳者の技能とはあまり関係がない。英文では情報単位 (information unit) だろうが、もともと日本語で書かれた同種のテキストと比べて、時間的前後関係、原因と結果、判断と根拠、結論と理由などの関係を基盤に強く結びつけられている傾向が強い。そこで、英語から翻訳した日本語テキストにおいては、先行文・後続文を指し示すためのコ系・ソ系指示詞の使用が多くなりやすい。

「実践報告」では、『日本経済新聞』のコラム「私の履歴書」から 6 人分の英日翻訳テキストと、6 人分の日本語書き下しテキストを使い、生起するコ系・ソ系指示詞の数を比較した。1 回分のテキスト(1,250 字前後)に、翻訳テキストではコ系・ソ系指示詞が平均 11.3 回使われており、日本語書下しテキストには 6.0 回使われていた。倍近くの差があることが判明した。

本稿では、上述の 3 つのコ系・ソ系指示詞発生源のうち、1) の英語テキストの結束装置の不必要な訳出、不用意な定訳使用については除外し、それ以外のコ系・ソ系指示詞の使用について、いづらかでも減らせる可能性を考察したい。(本稿の前に、「実践報告」に目を通していただけるならば幸甚である。)

2. 読者に好まれる訳文を目指して

英日翻訳テキストからコ系・ソ系指示詞をもう少し減らすことはできないかと考えるに至った経緯について触れておきたい。

コ系・ソ系指示詞の使用を減らせるなら、そのほうが読者に好まれる訳文が作れるのではないかと考えた。根拠は、以下に紹介するアンケート調査である。

筆者は、過去数年間に担当してきた翻訳講座で、以下の (2-a) と (2-b) の文章のどちらが好きかを問うだけの簡単なアンケートを行ってきた。アンケート回答者はこれまで 100 人を超える。大学生が多いが、社会人も 20 人程度含まれる。(2-a) と(2-b) のどちらを先に読むかが選択に影響する可能性も考慮し、ときには掲載順序を変えて実施してきた。

(2-a)

多くの親は、タリバンに立ち向かい、子どもたちが教育を受けられるよう学校を再建している。親たちが再建した学校はこれまでに 538 校に達し、タリバンによって破壊された数を大きく上回っている。多くの親たちは、20 年以上にわたって続いたアフガニスタン内戦のために、正規の教育を事実上まったく受けずに育った。親となった彼らは今、子どもたちに読み書きを学ばせようと心に決めている。これが、アフガニスタン復興のひとつの原動力となっているのである。

(2-b)

親たちの多くはタリバンの脅しに屈することなく学校を再建し、わが子を学校に送って

いる。再建された学校は焼き打ちの数をはるかに上回り、538校に達する。内戦は20年以上に及んだ。親たちは、ほとんど教育を受けずに育った。「せめて我が子には読み書きができるようになってほしい」。そうした思いが復興の原動力になっているのだ。

アンケート回収後に種明かしをするのだが、(2-b) はもともと日本語で書かれた朝日新聞の社説(2007年7月24日)の一部である。(2-a) は、それが英訳されて The International Herald Tribune/Asahi Shimbun (July 24, 2007) に掲載されたものを、プロ翻訳者に依頼して日本語にバックトランスレーションしたテキストである。以下に The International Herald Tribune/Asahi Shimbun の対応部分を引用する。

(2-c)

Many parents are standing up to the Taliban and rebuilding schools so their children can receive an education. Schools so far rebuilt by these parents total 538, far more than those destroyed by the Taliban. Many parents grew up with practically no formal education because of the Afghan civil war that raged for more than 20 years. Now as parents, they are determined that their children learn to read and write. This is one of the driving forces of Afghanistan's reconstruction.

(2-a) [バックトランスレーション] のほうが(2-b) [オリジナル] より指示詞がひとつ多いが、それ以上に目を引くのは、結合レベルの違いである。オリジナルでは、「内戦は20年以上に及んだ」と、「親たちは、ほとんど教育を受けずに育った」との関係が明示されていない。英訳者は、このままセンテンス単位で英語にすると「点がぼつりぼつりと置いてあるだけで、点と点を結ぶ線がない」(Baker, 1992, p236, 日本語訳=筆者)との印象を与えかねないと考えたのだろう、because という、因果関係を明示する接続詞で両者をつなぎ、ひとつのセンテンスにまとめている。これは、ブルム＝クルカの明示化仮説 (explicitation hypothesis) とも合致する。原文では「せめて我が子には読み書きができるようになってほしい」という直接引用が、ひとりの親の独白のような形で地の文から浮き上がっている。しかし英訳は、この部分を determine の目的語として連辞構造の中に取り込んだ。もともと単なる並置であった2文を、従属節結合でつないでいる。一方の節が他方の中へと吸収統合されると、節と節との結合の度合いが引き上げられる(小山 2009, pp.124-126)。要するに、コ系・ソ系指示詞の使用も含め、バックトランスレーションは、オリジナルよりも、節と節の関係が明確に示され、しかも節どうしが密につながっているのである。

さて、どちらが好ましいかを問うアンケートではだいたい一貫して7対3の割合で、(2-b) を選んだ回答者が、(2-a) を選んだ回答者を上回ってきた。最近の調査(2016年5月13日 於・上智大学、2016年7月21日 於・青山学院大学)では、合計28人から回答を得た。(2-a) を選んだ回答者6人に対し、(2-b) を選んだ回答者は22人で、全体のおよそ8割に達する。今回の調査では初めて、任意で選択の理由をひと言書いてもらった。代表的な選択理由をいくつか紹介する。

(2-a) を選んだ回答者

- ・「(a)のほうが親の思いが強く感じられる」
- ・「(b)は、文と文のつながりがわかりにくい」
- ・「(a)のほうが、視点がわかりやすい気がする」

(2-b) を選んだ回答者

- ・「すっきりとまとまっている」
- ・「簡潔に書かれているのに加えて、わかりやすい」
- ・「(a)の文章は新聞や情報誌にあるような事実を伝えるための文章に感じるが、(b)はちょっとした読み物になっている。用途にもよるが、自分は文学的な (b) を好みます」
- ・「物語みたいだから」
- ・「直球で伝わりやすい。最低限の情報は伝えられている」
- ・「(a) は英語を訳しているような感じがする。(b) は新聞記事っぽい印象だが、わかりやすい」
- ・「(b) のほうが客観的で読みやすかった。(a) のほうが感情に訴えることには長けていると思うが、文が長いので読みにくい印象」
- ・「(a) は細かく書かれているため、自分の中で想像したり、雰囲気を感じ取るのが難しい。(b) は間(ま)があることで、文の雰囲気を感じられる」

「はじめに」で述べた、英日翻訳でコ系・ソ系指示詞が多用される第 2、第 3 の理由は、主に、ST(英語)で1つになっている節(またはセンテンス)を、TT(日本語)では複数の節(または文)に小分けして訳したときに、それら節と節(文と文)のあいだにつながりを作る、または節と節(文と文)の時間的、論理的関係を明示することに関連している。(例えば Jane Austen 著 *Pride and Prejudice* の冒頭 “It is a truth universally acknowledged, that a single man in possession of a good fortune, must be in want of a wife.” を、中野康司は「金持ちの独身男性はみんな花嫁募集中にちがいない。これは世間一般に認められた真理である。」と訳している。ST で1つのセンテンスにまとまっている情報を、TT で 2文に分けて、「これ」というコ系指示詞でつないでいる。) そうであるならば、上掲のアンケートで(2-b)を選んだ回答者が挙げたのと同じ理由—物語ふうで良い、文学的な感じがよい、間(ま)があるので雰囲気を感じられる—で、節と節(文と文)をつなぐためのコ系・ソ系指示詞の使用をもう少し減らせるならば減らしたほうが、読者に好まれる訳文ができるのではないかと考えた。

3. コ系・ソ系指示詞を「使わない」という選択の可能性

「実践報告」で引用した日本経済新聞の「私の履歴書」の中から、連載初日に危機の体験を書いている点で比較しやすかったジョージ・W・ブッシュ前米大統領と瀬戸雄三アサヒビール元会長のテキストを再度調べた。前者の初日(2011年4月1日)の

テキストには合計 17 回、後者の初日（2011 年 5 月 1 日）のテキストには合計 6 回コ系・ソ系指示詞が生起する。改めてブッシュのテキスト中のコ系・ソ系指示詞の不可欠性をひとつひとつ点検すると、以下に検討を加える 3 つの用途のコ系・ソ系指示詞について、程度の差こそあれ、省略の可能性が見えてきた。（第 4 項参照）

3.1 直接引用を言及指示するコ系・ソ系指示詞

英語の小説 “A small, good thing” (Carver, R. 1983) とその日本語訳『ささやかだけれど、役に立つこと』（村上春樹、1989）を題材に話法の変化を調査・分析した伊原(2011)によると、間接話法から直接話法への変化が 8 文、自由間接話法(描出話法)から直接話法が 13 文、NRSA (Narrative Report of Speech Act) または NRTA (Narrative Report of Thought Act) から直接話法への変化が 5 文見つかった(注 1)。逆に ST の直接話法が、TT で間接話法やナレーションに変わった例は皆無であった。英日翻訳では、ST の間接話法や自由間接話法、NRSA/NRTA が直接話法に変えられる傾向がある。直接話法にしたほうが、発話の場が強く指標されるし、発話の社会指標性が色濃く出るため、読者が感情移入しやすいためであろう。

日本語から英語への翻訳ではこれと逆方向の変化が起こる。上掲の朝日新聞の英訳では、ひとりの親のつぶやきとして提示された直接引用 (3-a) が、(3-b) のような NRTA として地の文に取り込まれている。

ST:「せめて我が子には読み書きができるようになってほしい」…… (3-a)

TT: Now as parents, they are determined that their children learn to read and write.
…… (3-b)

(ST には、TT の “Now as parents, they are determined” に対応する情報がないことにも留意されたい。)

さて、英語 ST の間接話法や自由間接話法、NRSA/NRTA が日本語 TT で直接話法に変えられるとき、発話がひとつの独立した文の形をとることがある。以下に、ジャーナリスト、コラムニストである Bob Greene による ST と、エッセイスト、翻訳家である井上一馬によるその日本語 TT から 2 例を引く。

I asked him if he had seen his co-worker’s wife since the suicide.

「彼が自殺して以来、彼の奥さんに会ったことは？」私がたずねた。…… (3-c)

She asked: “How much longer will it be?” She didn’t wait for an answer. Another time she opened her eyes and said that she was “ready.”

「あとどれくらい生きられるだろう？」と母はいった。だが、答を待たずにふたたび目を閉じた。つぎに目を開けたとき、母親はこういった。「もういつでもいいわ」…… (3-d)

下線=筆者

(3-c) では、原文の間接話法を直接話法に訳し、並置した 2 つの節をつなぐ言葉は使っていない。一方 (3-d) では、引用第 3 文で後方照応の指示詞「こう」を使い、直接話法で提示したセリフ「もういつでもいいわ」との間をつないでいる。同じ翻訳者でも、ST の間接話法を TT で直接話法に切り替えて地の文から独立させる場合、コ系・ソ系指示詞を使うか使わないかはケース・バイ・ケースで選択していることがわかる。

もちろんこの現象は、ST で間接話法により提示されている情報を引用符付きのセリフ文とナレーション文に分けて訳す場合だけでなく、もともと ST で引用符 (quotations marks) 付きの直接話法で伝えられている発話をそのまま直接話法で訳している場合についても同様に観察できる。だが、ST の間接話法を、TT で直接話法のセリフとナレーションの 2 文に分けた場合のほうが、もともとの結合の度合いが強いだけに、翻訳者は、ナレーション文でコ系・ソ系指示詞を使ってセリフ文を指し示す必要を強く感じるのではないかと推測できる。別の言い方をすれば、もともと間接話法という従属節結合でつながれていた 2 つの節を、単なる並置の 2 節 (2 文) に訳出したときのほうが、2 節 (2 文) の間をコ系・ソ系指示詞でつなぐ必要を感じやすいのではないか、ということである。「はじめに」でも簡単に触れたが、英語 ST で句や節の形で主節に吸収・統合されている要素、または関係節結合あるいは従属節結合されている要素を翻訳するとき、上級者ほど日本語 TT でコ系・ソ系指示詞を使う傾向があることは、「実践報告」の中で確認した。

「実践報告」で引用したブッシュ前米大統領の「私の履歴書」(日本経済新聞、2011 年 4 月 1 日掲載)にある、

「この子供たちを守らなければならない」。心にそう誓った。

の ST は、もしかしたら

I swore to myself that I had to protect those children.

のような形をしていたのではないかという筆者の推測は、こうした考察に基づいている。(翻訳されて新聞に掲載される「私の履歴書」の ST は、入手不能。)

「実践報告」で使用した英語から日本語に翻訳された 6 人分の「私の履歴書」と、もともと日本語で書下ろされた 6 人分の「私の履歴書」を題材に、直接引用されたセリフとナレーションがそれぞれ独立した文として並置されている場合に、ナレーション文の中で、セリフ文を指し示すためのコ系・ソ系指示詞が使用されているものとされていないものを数え上げてみた。そして、使用率が高い順に並べたのが表 1 である。

(表1) ナレーション文でのコ系・ソ系指示詞の使用・不使用

著者	コラム記載の肩書	連載年月	コソ使用	コソ不使用	合計
ウィリアム・J・ペリー	元米国防長官	2010・12	21 (84%)	4	25
ジョージ・W・ブッシュ	前米大統領	2011・ 4	40 (83%)	8	48
カーラ・ヒルズ	元米通商代表部代表	2013・ 3	30 (76%)	9	39
トム・ワトソン	プロゴルファー	2014・ 5	24 (75%)	8	32
フィリップ・コトラー	マーケティング学者	2013・12	21 (61%)	13	34
小泉 淳作	日本画家	2011・ 8	4 (50%)	4	8
安藤 忠雄	建築家	2011・ 3	3 (30%)	7	10
トニー・ブレア	元英首相	2012・ 1	11 (28%)	28	39
岡本 綾子	プロゴルファー	2013・ 5	6 (26%)	17	23
瀬戸 雄三	アサヒビール元会長	2011・ 5	22 (22%)	75	97
松本 紘	理化学研究所理事長	2015・ 6	1 (20%)	4	5
森 善朗	元首相	2012・12	7 (14%)	42	49

* 「コソ使用」のセル中のカッコ内は、合計に占める比率を示す。

* 「合計」とは、直接引用されたセリフ文と、それを指し示す独立・並置のナレーション文とを1組と数えた場合の、組数の合計である。コ系・ソ系指示詞使用例と不使用例の合計件数である。

* 複数のセリフ文が、ナレーションを挟まずに連続する場合は、ひとつひとつを数えるのではなく、全体で「1」とした。

* 件数は少ないが、コ系・ソ系指示詞を使う代わりに例えば「次のように述べた」のようにナレーション文で「次の(次に)」を使い直接引用部に続けている場合は、「コソ使用」にも「コソ不使用」にも数えていない。

トニー・ブレアの「私の履歴書」は注意を引く例外だが、大ざっぱにみると、文として独立させたセリフを指し示すためのコ系・ソ系指示詞使用率は、翻訳テキストで 7~8 割、日本語書下ろしテキストで 2~3 割といったところだろう。ここにも、英日翻訳テキストでは、もともと日本語で書かれた同種のテキストよりコ系・ソ系指示詞の使用が多くなる原因の一部が見える。

比較に使ったテキストの中から数例を引く。

コ系・ソ系指示詞が使用されている例

「中国は軍事演習を終え、自陣へ撤収した。危機は今過ぎ去った、と理解している」

翌26日、私はワシントン市内での講演でそう述べ、台湾海峡危機の終結を宣言した。(ウィリアム・J・ペリー 2010年12月26日掲載) 下線=筆者

パットで勝利を決めたばかりの私に近づいてくると、ジャックは腕を私の首に回して、こう囁いた。「トム、一番のショットを君に捧げたつもりだったけど、まだ足りなかったみ

たいだな。おめでとう」(トム・ワトソン 2014年5月17日掲載) 下線=筆者

コ系・ソ系指示詞が使用されていない例

「あなたは1級建築士ですか」。ある日の打ち合わせで、依頼主から突然、尋ねられた。(安藤忠雄 2011年3月10日掲載)

苦しい状況が伝わったのか、あるとき、総長室に昔ガキ大将だった幼なじみから電話がかかってきた。「松ちゃん、最近いじめられとらへんか。いじめられとったら俺に言いや」。電話で話しながら思わず笑ってしまった。(松本紘 2015年6月25日掲載)

英日翻訳テキストのナレーション文で、セリフ文を指し示すための前方照応の指示詞「こう」「そう」または後方照応の指示詞「こう」を使うかどうかは、省きやすさにも関係しているだろう。日本語に訳したときの、セリフ文からの距離(直接引用部まで何文字あるか)や、STで使われている伝達動詞によって、省きやすかったり省きづらかったりするだろう。私見だが、上掲のトム・ワトソンの「こう」のほうが、ウィリアム・ペリーの「そう」より省きやすいように思える。

3.2 時間に言及する文頭のコ系・ソ系指示詞

カーラ・ヒルズ元米通商代表部代表の「私の履歴書」(2013年3月29日)のテキストに、こんな一節がある。

「もう、お手元のペーパー(応答要領)は置いて、いくつかの問題点について率直に話し合いませんか……」

まだ、米通商代表部(USTR)の代表を務めていた時、東京・霞が関にある通商産業省(現・経済産業省)で交渉相手である担当大臣にそう提案した記憶がある。

その時、この大臣はまだ着任したばかりだった。(下線=筆者)

以下は、ジョージ・W・ブッシュ前米大統領の「私の履歴書」(2011年4月21日)の中の一節である。

カトリーナはフロリダ州に上陸後、ルイジアナ・ミシシッピ両州付近に再上陸。最大風速が毎秒70メートルを突破し、その勢いも5段階の分類で最も強い「レベル5」にまでなっていた。

この時、私はテキサス州クロフォードの私邸から非常事態宣言や「災害宣言」を発令した。(下線=筆者)

「とき」「こと」「ため」「まま」など、形式名詞またはそれに準じる名詞につく「この」「その」は義務的であって、例えば「このまま」から「この」、「そのため」から「その」を取り去って「まま」「ため」だ

け残すことはできない。しかし「この」「その」がついた句を丸ごと取ってしまうなら話は別である。上掲の引用テキストから「その時」「この時」をそっくり取り去ると、次のテキストが得られる。

(前略)まだ、米通商代表部 (USTR) の代表を務めていた時、東京・霞が関にある通商産業省 (現・経済産業省) で交渉相手である担当大臣にそう提案した記憶がある。
この大臣はまだ着任したばかりだった。

(前略)最大風速が毎秒 70 メートルを突破し、その勢いも 5 段階の分類で最も強い「レベル 5」にまでなっていた。

私はテキサス州クロフォードの私邸から非常事態宣言や「災害宣言」を発令した。

両 ST の著者 (カーラ・ヒルズ、ジョージ・W・ブッシュ) は、おそらくパラグラフの切り替わり部という事情もあってか、なおさら先行文との結束性を維持する必要を感じて *at the time* などのフレーズを文頭で使っているのかもしれない。しかしこうして比較してみると、おそらく日本語では文頭での「この時」「その時」の必要性が、英語より低いのではないかと推測できる。もちろん、ST の対応部分に *at the time* が使われていたとしての話だが。

アメリカ文化の中では、他の多くの文化と同じように、「時間」は人のさまざまな営みを体系化するための支配的原理であり、アメリカ人は、さまざまな出来事を時間軸上でつなぎ合わせる (Hall 1976)。また、類似のテーマについて書かれた英字新聞と邦字新聞の社説を比較すると、英字新聞のほうが邦字新聞よりも、時間の表示が有意に多い (Katori 2004)。Baker (1992) も次のように書いている。「時間は、英語で体験を語る時に不可欠な一側面である。英語では、ある出来事を語ろうとする際、それを過去・現在・未来のいずれにも位置づけずにおくことは事実上不可能なのである」(p. 86、日本語訳=筆者)。つまり、英語話者が英語で書くならば時間表示を入れる状況でも、日本語話者が日本語で書くとするれば、文脈に任せて時間表示を入れないケースは十分に考えられるのである。とくに英語 ST でセンテンスの冒頭に現れる *at the time* などのフレーズについては、省略しても日本語テキストの *coherence* (内容の一貫性) と *cohesion* (結束性) の点では差支えない場合もある。

Halliday (1985) は “then” を意味する時間の語句を *conjunctive Adjunct* と分類し、*characteristically thematic* であるとしている。つまり、その性質上、テーマの位置 (文頭) に置かれやすい語句なのである。それだけ、文頭にあるときは、読み手 (聞き手) の注意を引かない。センテンスの主語 (*Subject*) ではないので有標のテーマ (*marked Theme*) ではあるが、付加詞 (*Adjunct*) として普通にテーマの位置に置かれるため、同じ位置に置かれた例えば目的語 (*Object*) や補語 (*Complement*) などと比べれば、その有標さ (*markedness*) ははるかに低い。読者側から見ても、文頭の *at the time* は旧情報であって、その重要性は低い。

日本語は英語よりコンテキスト依存度が高いため、聞き手 (読み手) は、話し手 (書き手) と同じ視点で、描写されている出来事を体験していく。観念的な説明を挟むことなく語られる場面を話し手とともに自分の視点で順次とらえながら追体験するのである。客観的な解説に頼らず、話し手 (書き手) が自分の視点を生の形でぶつけていく手法は、解説文よりも、日本語として

生きた臨場感を与えることができる(森田 1998)。Halliday の機能文法では、Theme は話し手(書き手)が発話の起点、出発点として選ぶ要素である (Halliday 1985)。しかし日本語文章の書き手は、もともと、読み手が自分と同じ出発点にすることを前提に書く傾向が強い。ならば、英語 ST で文頭に現れる at the time の類を「いちいち訳さない」という選択肢があってもいいのではないだろうか。もちろん、別の時と対比させて「その時」「この時」と書いているのであれば一恐らくその場合には at the time よりも at that time とする場合が多いと思われるが一訳さないとならない。

3.3 因果関係に言及する文頭のコ系・ソ系指示詞

第 2 項で紹介したアンケートでは、(2-a) よりも (2-b) の日本語テキストのほうが圧倒的に高い支持を集める。(2-b) のほうが、文学的である、物語ふうである、想像力を働かせる余地があるなどの理由が挙げられている。とくにどの部分で違いが出るのだろうか。思い当たる箇所はいくつかあるのだが、ここでは、「原因と結果」で意味的につながっている以下の 2 文に注目したい。

内戦は 20 年以上に及んだ。親たちは、ほとんど教育を受けずに育った。

「20 年以上におよんだ内戦が原因で、親たちは学校に行けなかった」というように、第 1 文を「原因」、第 2 文を「結果」と読むのが自然であろう。(実際、英訳はこの因果関係を明示して Many parents grew up with practically no formal education because of the Afghan civil war that raged for more than 20 years. としている。下線=筆者)

であるならば、

内戦は 20 年以上に及んだ。そのため、親たちはほとんど教育を受けずに育った。

としてもよかったはずである。しかしそうした付け足しが (2-b) の評価を下げるであろうことは、回答者らが挙げた選択理由一(2-a) は細かく書かれているため、自分の中で想像したり、雰囲気を感じ取るのが難しい、(2-b) は間(ま)があることで、文の雰囲気を感じられる、物語のようでよい、文学的で好ましい—から明らかである。

アメリカ人は、ある出来事が別の出来事に引き続いて起きたとすれば、一方を他方の原因としてとらえ両者間の因果関係を見い出そうと努める(Hall 1973)。第 2 項でも触れたが、西洋人が、日本語話者の文章をしばしば「点がぼつりぼつりと置いてあるだけで、点と点を結ぶ線がない」(p. 3 参照)と感じるゆえんでもある。

逆に言えば、英日翻訳では、英語 ST で文頭に現れる for this (that) reason や as a result などは、日本語 TT でいちいち「このため」「そのため」「この結果」「その結果」と訳さなくても済む、もしくは訳さないほうが好ましい場合があるということでもある。また「このため」「そのため」で先行文に結びつけるよりも、文末に「のだ」を置いて、先行文とつなげたほうがいい場合もある。

るだろう。

プロゴルファーのトム・ワトソンの「私の履歴書」(2014年5月8日掲載)から引く。

シード権を得た3年目に初勝利を手にし、年間のランキングも10位まで跳ね上がった。この結果、有力若手ゴルファーの一人と見なされるようになった。(下線=筆者)

「この結果」はなくてもいいだろう。元米通商代表部代表のカーラ・ヒルズの「私の履歴書」(2013年3月12日掲載)からも一例。

夫がSECの委員長になった頃、海外での商談を確かなものにするため、多くの米国企業がいわゆる賄賂を提供していたことが明るみに出た。その中でもメディアを賑わせたのは、ロッキード社による田中角栄首相に対する贈賄だった。この結果、田中首相は退陣を余儀なくされ、ロ德里ックは対外不正支払防止法(FCPA)の成立(規定、文言)につながる改革を断行した。(ロ德里ックはカーラ・ヒルズの夫の名前。注=筆者、下線=筆者)

STではおそらくas a resultなどのフレーズが文頭で使われていたと推測できるが、やはり、TTでもなくても済む。

Halliday (1985) は、for this reason、as a resultなどもconjunctive Adjunctに分類している。文頭で使用されるこれらのフレーズは、3.2のat the timeと同様、先行文とのつながりの役割を担っているだけで、書き手が重きを置く情報ではない。as a result of thisのof thisが省略された旧情報である。もちろん、文中・文末に位置してRhemeの構成要素となっているfor this reason / as a resultは、焦点の中にある重要な情報なので、日本語に訳すときも省略できない。

4. アンケート調査

「実践報告」で引用したジョージ・W・ブッシュ前米大統領の「私の履歴書」(2011年4月1日掲載)から、セリフ文を指し示すソ系指示詞「そう」、時間に言及する文頭のコ系指示詞「この時」、因果関係に言及する文頭のコ系指示詞「そのために」の計3つのコ系・ソ系指示詞を削除したテキスト(4-a)を用意した。ただし、「そのために」を削除した第2段落最後の文は「のだ」で結び、先行文とのつながりを残した。この(4-a)と、原・日本語訳テキスト(4-b)を1枚の紙の上下に印刷して読み比べてもらい、良いと思うほうを選んでもらった。任意で、選択理由をひと言書いてもらった。今回も、読む順序が印象に与える影響を排除するため、アンケート用紙の半数では(4-a)と(4-b)の順序を入れ替えた。アンケートは、社会人向け英語読解力講座の受講生30人(2016年9月14日～9月17日にかけて実施)と、大学の翻訳講座の受講生29人(2016年9月29日 於・青山学院大学、2016年9月30日 於・上智大学)を

対象に行った。なお、社会人アンケート回答者の年齢は 30 代から 70 代までさまざまだが、およそ半数には翻訳(学習)歴がある。このことが、無作為に抽出した一般成人を対象としたアンケートとは多少異なる結果につながった可能性は否めない。

(4-a)

危機を悟った最中に探し求めたのは「静けさ」だった。2001 年 9 月 11 日。時計の針は午前 9 時を回ろうとしていた。

テキサス州知事時代に学んだことは多い。その一つに「指導者たるもの、どのような危機に際しても泰然自若とすべし」ということがある。リーダーが過剰に反応すれば、即座に国民にも伝搬する。だから、大統領としての行動は常に客観的に見つめていなければならない。一瞬でもいい、私だけの静謐な時間が必要だったのだ。「我が国が攻撃にさらされています」。遊説先のフロリダ州で小学校を訪れていた私にアンディ・カード首席補佐官が耳打ちした。すでにニューヨーク・摩天楼の象徴、世界貿易センタービルに2機目の旅客機が突入し、未曾有の惨事を引き起こしていた。

(4-b)

危機を悟った最中に探し求めたのは「静けさ」だった。2001 年 9 月 11 日。時計の針は午前 9 時を回ろうとしていた。

テキサス州知事時代に学んだことは多い。その一つに「指導者たるもの、どのような危機に際しても泰然自若とすべし」ということがある。リーダーが過剰に反応すれば、即座に国民にも伝搬する。だから、大統領としての行動は常に客観的に見つめていなければならない。そのために一瞬でもいい、私だけの静謐な時間が必要だった。「我が国が攻撃にさらされています」。遊説先のフロリダ州で小学校を訪れていた私にアンディ・カード首席補佐官がそう耳打ちした。この時、すでにニューヨーク・摩天楼の象徴、世界貿易センタービルに2機目の旅客機が突入し、未曾有の惨事を引き起こしていた。

社会人回答者 30 人から得た解答は (4-a) が 16 人、(4-b) が 14 人となり、好みがほぼ半々に分かれた。大学生回答者では(4-b) のほうがやや優勢で 17 人、(4-a) が 12 人だった(ほぼ 6 対 4 の比)。おもな選択理由を挙げると、

(4-a) を選んだ回答者の選択理由

- ・(4-b) は接続詞によって、冗長な印象を受ける。(4-a) のほうがより緊迫した感じがする。
- ・「そのために」などがない方が、緊迫した感じがあって好きです。
- ・(4-a) のほうがドラマチックな感じがする。
- ・文章が自然に感じる。

- ・余分な「そのために」「そう」がない分、臨場感がある。
- ・(4-b) の「そう」は **redundant** な感じで好きでない。「のだ」のほうが「そのために」より、理由を言われて「本当にそうだね」って共感できる。
- ・「そのために」がないほうがすっきりする。8 行目の「この時」も不要。
- ・(4-b) は丁寧な印象がありますが、(4-a) のほうが無駄がなく、テンポよく読めて気持ちがいい。
- ・「そのために」と前置きにあるより、セリフ感があり、必死な感じが伝わってくる。「この時」はあってもなくてもいい。

(4-b) を選んだ回答者の選択理由

- ・文と文のつながりがよくて読みやすい。(4-a) は文と文のあいだに **gap** を感じる。
- ・「そのために」「そう」「この時」という文言が入るだけで文章が流れ、理解しやすい。
- ・(4-a) は文章がセンテンス毎に途切れている感じがする。
- ・直前の文とのつながりがわかりやすく、読みやすい。
- ・緊張感が伝わる感じがする。
- ・するする読み心地がよいように思われる。
- ・きれいなのは (4-a)。でも解りやすいのは (4-b)。解りやすさで選びました。
- ・「この時」という表現が入っている方が自然であり、これがないと、いつ旅客機が突入したのかが把握できない。
- ・「この時」という表現により、大統領の求める「静けさ」に対するニューヨークの被害の大きさが強調されるから。
- ・「そう耳打ちした」の「そう」がないと個人的には読みにくいです。
- ・(4-a) より時系列が分かりやすい気がする。

5. まとめ

第4項のアンケートでは、支持の高い第2項 (2-b) のような文体に少しでも近づけられないかと考えてコ系・ソ系指示詞の使用を減らしてみたのだが、評価が割れてしまい、予想した結果にはならなかった。(2-b) を以下に再掲載する。

親たちの多くはタリバンの脅しに屈することなく学校を再建し、わが子を学校に送っている。再建された学校は焼き打ちの数をはるかに上回り、538 校に達する。内戦は 20 年以上に及んだ。親たちは、ほとんど教育を受けずに育った。「せめて我が子には読み書きができるようになってほしい」。そうした思いが復興の原動力になっているのだ。

第4項のアンケートから言えることだが、文として独立させたセリフを指し示すためのコ系・ソ系指示詞の使用と、文頭での「この時」「その時」「このため」「そのため」「この結果」「その結果」の使用を、ただ単に減らせばいいというものではない。やはりケース・バイ・ケースで判断する

必要があろう。例えば第 2 段落最後の文(第 1 段落冒頭を第 1 文として、第 8 文)「一瞬でもいい、私だけの静謐な時間が必要だった」は、第 1 文「危機を悟った最中に探し求めたのは『静けさ』だった」の理由として読めるのだが、第 1 文と第 8 文のあいだに約 150 字におよぶ背景説明がある。この部分を越えて第 8 文を第 1 文につなげるには、「のだ」(第 8 文末)の持つ結束力では不十分であり、やはり文頭で「そのために」を使ったほうがわかりやすかったかもしれない。また、このように国家的危機の始まりを伝える緊迫したテキストではなく、もう少し展開の緩やかなテキストを使用していたら違った結果になっていたかもしれない。

ただ、3 つのコ系・ソ系指示詞を抜いたテキスト(4-a)のほうが良いとする回答が半数近くあったことにも注目したい。そして (4-a) 支持者から、(2-a) と (2-b) の比較で後者を選んだ回答者の選択理由と似たコメントが寄せられたことも意義深い。すなわち、コ系・ソ系指示詞を減らしたテキストのほうが「ドラマチックで「臨場感がある」のである。森田のいう意味で、読み手が書き手と視点を共有しやすいからであろう。しかし同時に、「文と文のあいだに gap を感じるのが良くない」(4-b 選択者コメント)とする読者もいるということだ。「するする読み心地がよい」(4-b 選択者コメント)と感じられるのは (4-b) のほうである。

両者の違いを的確に言い当てた一節が、作家・井上ひさしの『自家製 文章読本』の中にある。

物語性や叙事性には、文間の余白が関係してくる。接続言なしに、文や句がぼきりぼきりと無技巧に並べられ、文間の余白が深く抉られるとその文章は自然に叙事性を獲得しはじめるのだ。(中略)

巧みに用いられた接続言はゴツゴツと骨張った語調をやわらかく和らげる。接続言を多用すると、文章のすべりがよくなり、速度感が出る。ひっくるめて、要所を接続言でうまく固められた文章では、思考の展開や語順はたいそうなめらかである。だが、一から十までいいことづくめはなかなか望めない。思考の展開や語調がなめらかになるにつれて文間の余白は浅く、かつ狭くなる。読み手はその分だけ、自分で文間の余白を埋めるたのしみを奪われてしまうのだ。(pp. 95-97)

井上は、接続詞など文と文をつなぐ言葉をひっくるめて「接続言」と呼んでいるのだが、「接続言」に、先行節(文)または後続節(文)とのつながりをつくるために使うコ系・ソ系指示詞を含めることに異論はないだろう。

ここで一つの結論が得られる。すなわち、TT に井上のいう物語性、叙事性を持たせようとするなら、論説・説明文を訳しているときよりもコ系・ソ系指示詞を減らす選択が有効である。読者が「わかりにくい」と感じるほどに減らしてしまうと元も子もないのだが、適切なレベルの減らし方があると思われる。独立したセリフ文を、先行または後続のナレーション文で指し示すためのコ系・ソ系指示詞の使用・不使用について、「日本経済新聞」のもとと日本語で書かれた記事の中からいくつか例を拾ってみた。

「色々な反省点もある」。12 日の副大臣会議で中山氏はこう報告した。ヨルダンの首

都アンマンで記者団に囲まれた中山氏はいつも沈痛な面持ちで質問に答えていた。
(風見鶏「現地本部長、命預かる重み」2015年2月15日)下線=筆者

「これからは非衣料、非繊維を狙っていく」。87年に社長になった川田達男(75、現会長)は着任後早々にこう宣言した。「革新力 The Company 異端になる(1)」
「本業は変わってもいい」2015年2月22日)下線=筆者

時代の曲がり角で歴史は、いや応なく人々に「見るべきもの」「見なければならぬもの」を提示する——。思想史家の河原宏氏は「日本人の『戦争』」にそう記し、さきの戦争も今なお「見るべきもの」だと唱えた。「春秋」日本経済新聞 2015年2月22日)下線=筆者

「一罰百戒だ」。公取委委員長の高橋俊英(故人)は記者会見で語った。当時、独禁法には行政上の制裁である課徴金制度がなかった。「事件は問う 戦後 70年『お墨付き価格』官の責任不問」2015年3月22日)

「ゴータマ・ブッダの人生や前世の一場面などが刻まれています。(中略)ヤクシャ、ヤクシーといった民間信仰の神々の姿も刻まれています。仏教遺跡ですが、さまざまな要素が採り入れられているのが特徴です」。広報担当のスメント・ロイ氏が説明してくれた。「旅するゴータマ・ブッダ^⑤ インドの仏」2015年2月22日)

「劇場を始める前は常設の舞台が国内になくて、人形を操る技術を受け継ぐ機会もほとんどなくなっていました」。創設者のママナインさん(60)が振り返る。
(「ミャンマー美術 祈りのかたち^⑥」2015年3月22日)

最初の3例では、ナレーション文の中で、直前のセリフ文を指し示すためのコ系・ソ系指示詞が使われている。残りの3例では使われていない。もちろん、この6例だけで全体の傾向を語ることはできないが、記事の内容というよりは、それをどう伝えるか、つまり、報道文として読ませるのか、物語ふうの書き物にするのかによって、意識的にか無意識にか、コ系・ソ系指示詞の使用・不使用を選択しているように感じられる。

プロ翻訳者が産出するテキストでも、もともと日本語で書かれた同種のテキストと比べてコ系・ソ系指示詞の生起頻度が高い(「私の履歴書」の比較では、平均で6.0対11.3)。その理由をあえてひと言でいうならば、「英語テキストは、ひとつの情報ユニットとそれに隣接する情報ユニットの結合レベルが高いから」ということになる。英語STで使われている結束装置だけの問題ではなく、数々の句や節をひとつのセンテンスにまとめ上げる英語連辞軸の強さ(平子 1999、pp. 84-87)や、時間的前後関係・因果関係などを明示したがる書き手の志向や、(文芸作品を別として)パラグラフごとに後続の情報内容をある程度規定するトピックセンテンスの存在などが相まって、結合レベルの高いテキストが作られる。あとの2つと関連するが、言語コミュニケ

ーションの成否について、アメリカ文化では、日本とは反対に、話し手(書き手)のほうが聞き手(読み手)よりも大きな責任を負う(池上 2002、p. 194)という傾向全般も、誤解の生じる余地を残さない確実な文章展開を書き手側に求めるという点で、英語テキストの結合レベルの高さの遠因となっているかもしれない。一方、解説文よりも、話し手(書き手)が自分の視点で臨場感を持って語る手法に慣れ親しんできた日本語話者読者は、コ系・ソ系指示詞がふんだんに使われたテキストには感情移入しづらい。また、時間的前後関係や因果関係などでひとつの文に次の文を積み上げた感じのするテキストよりも、文と文のあいだに余白があり、水平的に進行するテキストを好む傾向とも関係しているのかもしれない。「実践報告」で引用した日本画家・小泉淳作の「私の履歴書」にコ系・ソ系指示詞がほとんど使われていないのは、ひとつの文をベースに次の文を積み上げる、あるいはひとつの文を後続の文が支持するというよりは、互いに原因(根拠)・結果(結論)の関係はなく、明確な時間軸もなく、トピックセンテンスとその支持文(supporting sentences)の関係にもない、内容的に対等な文が段落ごとにまとめて並置しているからであった(添付資料 2)。建築における日本人の「水平線志向」(加藤 2007、pp. 188-193)とも相通じるのかもしれない(注 2)。いずれにしても翻訳者には、情報の結合レベルの強い ST を、無理のない範囲で日本語話者の好むレベルに近づける工夫が求められる。

(2-c) を ST として、(2-b) のような TT を産出することはできない。今の時代の翻訳者、翻訳エージェント、クライアントが共有する「翻訳の規範」からのズレがあまりに大きいという、(2-b) のような訳文を作るとしたら、翻訳者にかかなりの創造力が求められるからである。しかし「自然な日本語」を重視するのも今の時代の英日翻訳の規範(Katori 2004)である。だからこそ、プロによる英日翻訳テキストでも日本語書下ろしの同種のテキストと比べてコ系・ソ系指示詞が多くなる傾向があることを、まずは認識する必要がある。そして、Halliday & Hasan (1976) が reference として分類している結束装置を不必要に訳出しないのは当然として、それだけでなく、3.1~3.3 で考察したタイプのコ系・ソ系指示詞も、TT の趣旨を考慮したうえで(説明文として読ませるのか、物語ふうにするのか)、無理のない範囲で減らすべきだろう。

.....

【著者紹介】

香取 芳和(KATORI Yoshikazu)フリーランス翻訳者、講師。2010 年まで 20 年近くにわたり社会人向け翻訳講座で講師を務めた。現在は上智大学と青山学院大学で非常勤講師として英日翻訳の授業を担当しているほか、個人で、社会人向け英文読解講座を運営している。複数の翻訳エージェントの在宅・派遣翻訳者採用試験(トライアル)の採点業務も担当している。

.....

(注 1)

伊原は、直接語法を「(引用符を使用していること、ではなく)引用された言葉が元発話者の発話らしさを帯びており、伝達の間から独立していること」(p. 53)と規定し、「元来直接語法・間接語法という概念は西洋文法のものであり、日本語においては、統語的な基準だけではその区別がつけられない場合が多い」(p. 87)としたうえで、「(小説内の)語り手が伝達者となり、登場人物の声を直

接伝えれば直接話法となるし、語り手の視点に立った報告をすれば間接話法と考える」(p. 93)としている。

(注 2)

加藤は「日本の建築的空間の特徴の一つは、強い水平線志向であり、高さを強調する建物は少ない」(p. 188)と書いている。「原則の一つは、天へ向かって上昇する空間—西洋中世のゴシック聖堂において典型的な空間—とは対照的に、『オク』に入り込もうとする空間である。(中略)原則のもう一つは、建増しである。機能に応じてまず一部屋を作り、同様に必要な第 2 の部屋を加え、『建増し』過程がすべての機能的必要を満たした時、または予算の尽きた時、設計中なら平面図の作画をやめ、建設中なら建設を終る。最終的に全体がどういう形になるかは、少なくとも仕事を始めたときには誰にもわからない。これはゴシック聖堂の場合と根本的にちがう点である」(p. 192)。

【参考文献】

[洋書]

- Baker, M. (1992) *In other words: A coursebook on translation*. London: Routledge.
- Blum-Kulka, S. (1986) *Shifts of Cohesion and Coherence in Translation*. In House, J. & Blum-Kulka, S. (eds.) *Interlingual and Intercultural Communication: Discourse and Cognition in Translation and Second Language Acquisition Studies*. Tübingen: Gunter Narr.
- Halliday, M.A.K. revised by Matthiessen Christian M.I.M. (1985) *An introduction to functional grammar*. Third Edition. London: Arnold.
- Halliday, M.A.K. & Hasan, R. (1976) *Cohesion in English*. London: Longman Group Limited.
- Hall, Edward T. (1973) *The silent language*. New York: Anchor Books.
- Hall, Edward T. (1976) *Beyond culture*. New York: Anchor Books.
- Katori, Y. (2005) *A Gricean analysis of journalistic texts in translation between Japanese and English*. Master's thesis submitted to Rikkyo Graduate School of Intercultural Communication [Unpublished].

[和書]

- 池上嘉彦 (2002) 『自然と文化の記号論』財団法人 放送大学教育振興会
- 伊原紀子 (2011) 『翻訳と話法 語りの声を聞く』松籟社
- 井上ひさし (1987) 『自家製 文章読本』新潮文庫
- 加藤周一 (2007) 『日本文化における時間と空間』岩波書店
- 香取芳和 (2016) 「実践報告『この』と『その』の記述的翻訳研究」日本通訳翻訳学会・翻訳研究分科会編『翻訳研究への招待』第 15 号, 65-83.
- 小山亘 (2009) 『記号の思想 現代言語人類学の一軌跡: シルヴァスティン論文集』三元社
- 平子義雄 (1999) 『翻訳の原理』大修館書店
- 森田良行 (1998) 『日本人の発想、日本語の表現』中公新書

[使用データ]

Green, B (1989) *Strangers on a plane*. Tokyo: 講談社英語文庫『チーズバーガーズ』収録 (p. 103)

Green, B (1989) *Mother and Child*. Tokyo: 講談社英語文庫『チーズバーガーズ』収録 (p. 121)

ボブ・グリーン (1993) 「飛行機の中の他人」文春文庫『チーズバーガーズ1』収録 (p. 35)

ボブ・グリーン (1993) 「母と娘」文春文庫『チーズバーガーズ1』収録 (pp. 176-177)

中野康司 (2012) 「小説における英文和訳と翻訳の違い」(第30回日本通訳翻訳学会関東支部例会 於・青山学院大学 配布資料)

*日本経済新聞、朝日新聞、*The International Herald Tribune/Asahi Shimbun* からの引用については、各引用箇所に出典を明記してある。

添付資料 1

ある翻訳講座で初級者が提出した訳と上級者による訳を以下に掲載する。(文中に登場する英国人ニックリンソンは、脳卒中により、意識はあるが体を動かすことがまったくできない「閉じ込め症候群」に陥った。回復が見込めないことを知り、医師の協力を得て命を絶つことを望んだが、イギリスの裁判所は「死ぬ権利」を認めなかった)。

(初級者訳)

なぜもっと多くの政府が安楽な死に対する権利を保障しないのだろうか。ほんの一握りの国々のみが、特定の人びとが医師の助けにより自身の命を絶つことを認めている。その他、いま可決しようとしている国や、イギリスのようにそれらを審議しているところなどがある。上院による法案はエコノミスト誌が望む以上に制約がある。しかしながら、それは、その法案に反対する理由とはなり得ないだろう。自由主義であろうとそうでなかろうと、政治家達は、倫理上の複雑な問題となればゆっくりと進むべきである。あなたの見解がどうであれ、これはもちろんそれにあたる。(中略)

上院のその法案は、英国で初めて幫助自殺を合法化しようとしている。しかし、死にたいという一個人が、2人の医師によって審査される必要があり、余命が6か月以内と判断されなければいけない。そして致死薬を自分自身で投与しなければならない。この現在の提案は、死が差し迫っていなかったニックリンソンさんを助けてはいなかっただろう。しかし、それはまた、1年に数千人の英国人に、ニックリンソンさんが苦しんだ痛みのようなものから脱出するチャンスを与える。そして、更なる自由化のための国民の支持を高めるだろう。私たちはそれが可決されることを願っている。(コ系 2、ソ系 9、計 11)

(上級者訳)

なぜ安らかな死を迎える権利を保障する政府がもっと多く存在しないのか気がなる読者もいるだろう。一定の状況にある個人に、医者のおかげのもと、自らの命を絶つことを許可している国はごく僅かだ。ほかに、法案を可決しつつある国、英国のように審議している国がいくつかある。英国貴族院の法案はエコノミスト誌が好むよりは規制が若干多いが、反対する理由にはならない。このように明らかに複雑な道徳的問題となれば、自由主義者であろうがなかろうが、政治家は慎重に行動すべきだ。(中略)

貴族院の法案はイギリスで初めて幫助自殺を認可することになるが、死を望む人は二人の医師から評価を受け、余命 6 カ月以内と判断されなくてはならない。許可が下りると、致死薬も自ら投与しなければならない。現在の法案では、死が差し迫ってはいなかったニックリンソンに救済をもたらすことは無理だっただろう。だがそれでも毎年数千人のイギリス人にニックリンソンが経験したような痛みから逃れるチャンスを与え、さらなる自由化への国民の支持も徐々に増やせるだろう。可決されることを願う。(コ系 1、ソ系 1、計 2)

以下に、上掲訳文に対応する原文を引く。

You might wonder why more governments do not guarantee the right to an easeful death. Only a handful of countries allow certain individuals to take their own lives with a doctor's help. A few others are passing laws, or—contemplating them, as Britain's is. A bill in its House of Lords has a few more restrictions than *The Economist* would want. But that is no reason to oppose it. Liberal or not, politicians should move slowly when it comes to complex moral issues, which, whatever your views, this certainly is. (中略)

The bill in the House of Lords would make assisted suicide legal in Britain for the first time, but require an individual wanting to die to be assessed by two doctors and be judged to have less than six months to live. He then would have to administer the lethal drugs himself. The current proposal would not have helped Nicklinson, whose death was not imminent. But it would still give several thousand Britons a year the chance to escape the sort of pain that Nicklinson suffered from, and would gradually increase public support for further liberalisation. We hope that it passes. (“Assisted suicide: Easeful death” –*The Economist*, July 17, 2014)

初級者訳の「コ系」「ソ系」指示詞に対応する原文中の要素は、others, them, that, it, this, the など Halliday & Hasan (1976) が reference として分類した結束装置が多い。そのほか “liberal or not” にみられる「省略」(ellipsis) も「それ」で訳している。「そのほか」と「その法案」(2 回)の「その」、「この提案」の「この」は、削除しても読者が指示対象を特定するうえで不都合を生じさせない。第 1 段落と第 2 段落で使われている「それは」「そ

れらを」はいずれも不要である。また第 1 段落最後の「これは」は「医師の協力による死が」に置き換えたほうがわかりやすいだろう。

添付資料 2 (日本画家・小泉淳作「私の履歴書」日本経済新聞 2011 年 8 月 6 日掲載の一部)

幼いころの師は格別の存在だ。(慶応幼稚舎のクラス担当だった)吉田先生は私の暗い少年時代の光明だった。幼稚舎は 1 年生のクラス担任がそのまま 6 年生まで持ち上がる。丸 6 年間、吉田先生のお世話になったのは非常に幸せなことだった。

私たちのクラスの担任になったころ、先生はまだ 20 代。子供心にも私心のない、純粋な心根を持った方だと思った。温和で物静かだった。叱られた記憶は一度もない。

低学年のころ、国語の授業でベートーベンの「月光の曲」の話が出た。すると先生は教室に蓄音機を持ち込み、レコードで月光の曲を流してくださったが、おとなしく聴いている我々ではない。

小声のおしゃべりが始まり、次第に騒がしくなって、取っ組み合いのけんかが始まるありさま。だが、先生は教室の中央で黙ったまま蓄音機のねじを回したり、レコードを裏返したりして、泰然と聴き入っておられた。

野草をこよなく愛された。遠足には小さなシャベルを持参して珍しい草花を採取した。世田谷・上野毛のご自宅の庭には丹精した清楚な花々が咲いていた。